

## 世界の学校とつながって教育のあり方を考える

### — 韓国の教育の現状とミラルトゥレ学校 —

*Thinking about the Way of Education Connecting to the Schools around the World*

*— The Current Situation of Korean Education System and Miraldure School —*

鎌倉 博 *Hiroshi Kamakura*

(人間発達学部)

#### 1. 特別授業と公開講座の開催

本学人間発達学部主催で、韓国・ミラルトゥレ学校のチョン校長を招いての特別授業（主に学生を対象にした昼の部）、並びに特別公開講座（主に学内関係者と一般参加者を対象にした夜の部）を企画した。

ミラルトゥレ学校とは、私自身が2015年3月まで赴任していた、学校法人和光学園 和光小学校とホームステイ交流していた関係の学校である。チョン・ギウォン校長（以下「チョン校長」と略す）とは、和光小学校長としてミラルトゥレ学校へ行き来する中で親交を深めている仲である。私が本学に赴任したことから名古屋へ行ってみたいとの申し出があった。ならば、名古屋観光をお手伝いする一方でぜひ本学で授業をお願いできないかと打診したところ快諾された。そこから本企画が実現した。

2015年1月21日、「韓国の教育の現状とミラルトゥレ学校」をテーマにして、チョン校長にお話いただいた。Power Point 映像を使われて約1時間半お話された。特別授業と公開講座の2回合わせて65名が参加した。51人もの学生が自主参加し、他学部・他大学生もこの企画を知って参加していた。本学では画期的なことだった。ミラルトゥレ学校からも、お願いしていたチョン校長と日本語通訳兼日本語教師のウンジュ先生以外に、チョン校長の奥様と高校生の息子さん、小学生のウンジュ先生の娘さんと息子さん、小学校教員のシン先生、中学校教員のソン先生も参加されて、それぞれの思いでミラルトゥレ学校を語った。本学にとってもミラルトゥレ学校にとっても、今回の交流に対する関心が高かったと言ってよいだろう。

#### 2. 韓国に対する日本の大学生のイメージ

ところで、日本の若者は「韓国」に対してどのようなイメージをもっているのだろうか。特別授業に参加した学生に「アンケート」記入を依頼した。参加した51人全員が協力してくれた。

「アンケート」は、以下2項目の質問に対して内容も回答数も自由な形式で行った。その回答の全てを打って収録し、筆者がおよそまとめられると考えた小見出しをつけて並べ

た。複数の者が同一回答した場合は各項の末尾に数字をつけた。数字のないものは1名回答として数字の表記は略した。

(1) 【アンケート1】の回答

「韓国」と聞いて思い浮かぶ食べ物・もの・人を書いてみて下さい。

● 「韓国」で思い起こされる飲食物

キムチ (39)、トッポギ (14)、韓国のり (10)、サムギョブサル (8)、チヂミ (7)、辛い食べ物 (7)、ビビンバ (5)、焼肉 (4)、スンドゥブ (3)、チゲ (2)、サムゲタン (2)、マッコリ (2)、ソルロンタン (2)、プルコギ、チリドック、ラーメン、おかゆ、コチジャン、ちゃんぽん、チーズポックンパ、カルビ、おいしいご飯、「韓国料理」

● 「韓国」で思い起こされる人物

キム・ヨナ選手 (8)、少女時代 (7)、ペ・ヨンジュン (4)、KARA (5)、EXO (5)、BIGBANG (3)、パク・シネ (2)、東方神起 (2)、オルチャン (2)、チャン・グンソク (2)、イ・ジョンソク、ジョン・ヨンファ、キム・ヒョンジュン、イ・ビョンホン、チェ・ホンマン、イ・サン・トンイ、オンドル、ユン・ウネ、パク・ヨンハ、チャンダム、SHINee、FTISLAND、CNBLUE、BOA、2PM、JYP、IU、SM、デボ選手、イ・ヒョンギョ選手、パク・クネ大統領

● 「韓国」で思い起こされるもの・場所

民族衣装 (チマチョゴリ・パジチョゴリ) (13)、kポップ (12)、「冬のソナタ」などの韓ドラ (10)、明洞 (4)、南大門 (3)、東大門 (2)、ソウル (2)、ソウルタワー (2)、アイドル (2)、化粧品 (2)、美容品、美容グッズ、コスメ、韓流映画、国旗、大韓航空、ロッテワールド、済州島、LINE、ハングル文字、ドリームキャッチャー、サッカー、「アンニョン・ハセヨ」

(2) 【アンケート2】の回答

「韓国」のイメージとして感じていることを書いてみて下さい。

● 日韓関係の印象

日本の隣国、飛行機で1時間で行ける、日本と近くてすぐに行ける、日本から近くて旅行で行きやすい、日本から安く気軽に行ける国、日本と変わらない、日本とイメージが似ている、日本と韓国はわりと似ていると思っている、日本人と顔が似ている、日本と交流が多い、日本との交流が深い、ドラマがたくさんあって日本のお昼によく放映されている、反日と言われているが日本に興味があって留学してくれている韓国人の学生は多い、日本と韓国の関係がよくなさそう (2)、日本と仲が悪い、反日の人

がいる、反日の人が多いイメージがある、お年寄りは半日のイメージ、日本と島・領土の問題で対立している、日本と考え方が全然違うイメージ、日本語を話せる人が多い、政治的歴史的に良くないと言われているが私達民間には関係なく仲が良い国だと感じている

#### ●教育の印象

学校教育、教育に熱心、学歴社会、勉強熱心、学力重視、頭がいい、学力が高い (2)、日本以上の受験戦争、PC がとても使える、受験戦争が激しい、受験、学生はすごく大変そう

#### ●食べ物の印象

食べ物がおいしい (2)、おいしいものがたくさんある、キムチを使った料理が多い、辛い食べ物が多い、辛いものが好き、辛いものがたくさんある

#### ●容姿の印象

美容大国 (5)、男女問わず美容に気を使っている、美容意識が高い、美人 (3)、化粧品にこだわる、きれいな人が多い (2)、みんな肌がきれい (2)、整形が多い (4)、みんな整形しているイメージ、イケメンが多い、男らしい、かっこいい人が多い (2)、スタイルの良い人が多いイメージ、みな同じ顔のように感じる (2)

#### ●性格的な印象

韓国人は気を使う、韓国旅行に行った時にことばが通じない中一生懸命に携帯電話の翻訳機能を使って説明してくれるなどとても優しい人ばかりだった、とにかく人が優しく親切、優しい人が多い、男の人が優しい、男の人は女の人に対してとても優しい、テレビではあまりよい話を聞かないが実際に行ってみると良い人が多い、情けに厚い人が多い、はっきりしている、せっかち、少しこわい

#### ●話し方の印象

声大きい、愛嬌があって可愛い、しゃべり方が可愛い、すごく早口ではっきりしゃべるイメージ、しゃべり方が早口な感じがする、話し方がこわい

#### ●対人関係の印象

上下関係が厳しい、武官が強い、女性が強い、家族愛がとてもある

#### ●街の印象

観光が楽しめる、観光がすごい、どちらかと言うと古い建物がたくさんあるイメージ (日本の奈良のようなイメージ)、環境があまりよくなさそう、きたない (2)、にぎやか、色鮮やか、治安運動が多い

#### ●その他の印象

物価が安い (4)、文字が難しい (3)、大好き、政治のことなどでトラブルが多い、北朝鮮とケンカしてそう、旅行に行くと体が臭くなる、中国と北朝鮮に近いので固いイメージ、中国と似ているようで文字も生活もかなり違う、ドラマでワイヤーアクショ

ンが多い、トイレトパーが流せない、ワールドカップで大量点差で負けてかわいそうだと思った、観光としてはよく知っているし行ってみたいと思うがあまり知っていることはない

### (3) 「アンケート」結果からの考察

日々の報道で流される情報だけを耳にしていると「ソウル日本大使館前の従軍慰安婦像問題」「独島の領有権問題」などで外交上日本との関係は決してよいとは言えない印象をもってしまう。「アンケート」の中にも「日本と仲が悪い、反日の人がいる、日本と考え方が全然違うイメージ、お年寄りには反日のイメージ、日本と島・領土の問題で対立している」と言い切った記述が見られる。

一方で、「日本とイメージが似ている、日本と変わらない、政治的歴史的に良くないとされているが私達民間には関係なく仲が良い国だと感じている」と好意的に受け止めて書いている記述も見られる。筆者が驚いたのは、食べ物や人物に韓国ならではの言語が当たり前で使用されていることである。日本の侵略戦争下では朝鮮語の使用は禁止され、使用した場合は処罰の対象であったとされている。そのような非情な時代から70年が過ぎた。様々な葛藤・苦難がありながら日韓関係は確実に改善の道を歩み、今では日本国内でも様々な場所で「韓国」を身近に感じるが増えた。特に、食品や料理、ドラマや音楽、衣装を通して親近感を深めているようである。

民族の歴史的背景から政治や社会の考え方や受け止め方に違いはある。そのため、国家間の関係づくりには時間がかかることは否めない。ましてや日本の侵略行為によって、朝鮮の人々の基本的人権は奪われ、戦争に巻き込んでしまった歴史の事実を簡単にぬぐうことは許されない。そのために余計に時間がかかろう。しかし、そうした政治的歴史的過去の一方で、元々古代日本は朝鮮・中国との交易を通じて様々な文化的影響を享受してきた。交易においては互惠の関係があったとも言える。

こうした歴史上の明暗は、現代を生きる学生達にも否応なく投影される。大切なのは、歴史の中での明も暗もともに歴史の事実として学び受け止め、とりわけ歴史の暗を明へと切り替える着実な道を真剣に考え行動していくことである。そのためにも、韓国を始めとした周辺国とも互いの理解を深め、節度ある外交を通して平和と安全、友好を築いていくことが大切である。

多国籍化が進んでいる日本の中で、韓国出身ないしは韓民族の血を引く人々が多く日本に住んでいる。教員・保育士を目指す学生においては、その子どもたちも日本に在籍しているかけがえのない1人として受け止められる教員・保育士になってほしいと願う。そのためにも、こうした隣国理解の機会は大事にされていかななくてはならない。

### 3. 韓国の教育とミラルトゥレ学校

#### (1) 韓国の教育

韓国には厳然たる序列がある。出身大学によって経済的・社会的な身分保障が違ってくる。そのために、韓国の家庭では、良い大学に入れるために早くから塾や習い事に通わせる傾向が日本以上に強いと言われている。

高安の研究に拠れば、学校教育に満足できない層が私教育（学校外の補助学習や習い事など）に通わせていて、その家庭の割合が多い。そのため、家計に占める教育費の割合が日本よりもかなり高く、それを押し上げているのもまた私教育に懸ける費用であると言う<sup>1)</sup>。

また、水田の研究に拠れば、教育熱の高さが幼児教育にも影響を与え、「幼児期の「早期教育」が子どもたちにストレスやその他の問題を引き起こしている。」と言う。そして、コウ・チョン・ヘソンの引用文として「学習紙症候群」を紹介している。そうして、「子どもの立場を顧みずに、無理やり『学習紙』による勉強を押し付けることで精神的に悪影響を及ぼし、小児精神科病院に通う子ども」たちが「増えている」としている<sup>2)</sup>。

これから紹介するミラルトゥレ学校のチョン校長が、現代の韓国の学校教育に危機感をもって、新しい教育を目指そうとした動機として証言されていた様子と、高安や水田が紹介している内容とは多くの点で共通している。能力主義による競争教育はかなり熾烈のようであり、そこで達成感を持つ子どもたちや保護者がいる一方で、それに疑問をもつ保護者や子どもたちもいるのが、韓国の教育の現実なのであろう。

#### (2) ミラルトゥレ学校

以下、チョン校長からの聞き取りと、ミラルトゥレ学校紹介パンフレットに基づいて紹介する。

##### ①ミラルトゥレ学校の歴史

公立小学校教員であったチョン・ギウォンは敬虔なクリスチャンである。そのため、博愛の精神から子どもたちが苦悩する姿に心を痛めていた。氏が通っていた教会で悩みを告白していく中で、教会立の新しい学校を立ち上げようという構想が生まれた。1998年、氏は志を同じくする者とミラルトゥレ学校の前身であるトゥレキリスト教小学校の教師準備会を立ち上げた。教育のあるべき姿を海外の先進の教育に求めて、オーストラリア・カナダ・スペイン・デンマーク・日本などの学校を視察した。そうして構想を練り、ついに実験学校を始めて、2005年正式にトゥレ小学校を立ち上げた。氏が初代の校長である。

チョン校長は、国際的な視野で先進的な教育を導入する一方、キリストの教えを通しての道徳教育、地域自然を生かした散歩・飼育・栽培活動を熱心に取り入れて、形式的な韓国一般の教育とは明らかに違う異色の教育を展開させている。その評判は教会を通して広く知れ渡るようになった。やがて小学校を卒業した生徒の受入校として、トゥレ小学校は

中学生も通えるトゥレ学校へと進化を遂げた。

ところが、経営を重視する教会との学校運営をめぐる意見の相違から、教会の考え方に反対する教員達が解雇される事態が生じた。チョン校長も解雇された1人であった。そこで、解雇された教員と牧師らで再び新しい学校づくりを進めることにした。校舎に適する建物探しなどでは、私どもが想像もできない苦難があったと思うが、「神の力」を信じて新学校実現に向けて動いた。幸い物心両面で支援してくれる保護者が多く、2010年には新たな教会立学校「ミラルトゥレ学校」を開設することができた。2年間は間借りの校舎であったが、資金集めに奔走した結果、2013年には念願叶って新校舎も完成させた。

現在小学校1年生から高校3年生までの12年生が通学している。その評判は全国ネット番組でも紹介され、話題が話題を呼んで、現在韓国内に2校目、さらに中国にも姉妹校を立ち上げるなど、国境を越えての新しい教育づくりも展開させてきている。

## ②ミラルトゥレ学校の理念と教育

### 1) 博愛の精神の涵養

チョン校長は学校紹介パンフレットの冒頭に次のような文を寄せている。

「ミラルトゥレ教育は、神の教えを正しく受け継ぎ、美しい奉仕と協同の精神を生かすためのものである。これらの精神を私たちの次の世代に受け継ぎ、より明るく、高く、人情味あふれ、愛が豊かな社会を作っていくことを願います。教会と家庭、学校の三位一体の基本的な土台の上で、小中高等学校の一貫性のある12年教育の中に発達段階を踏まえた教育活動を進めます。それは、神の教えに正しく準拠して生きるための人生であり、消えてきている独自の美しい奉仕と協力の精神を生かすためのものです。そのことは、誰もが幸せに人生を生きていく愛の共同体を作る知恵を獲得することになります。社会のために用いられる働き手として育つことは、イエスの子どもの頃の姿のように理性的、身体的、社会的、精神的な4つの領域での成長が促されることになります。この学校教育のために献身された教師と保護者の心と心を集めて神に尽くしたいと思います。」

このように、目指す子ども像を4つの成長の保障を通して、イエスの子どもの頃の姿になっていくことを目指している。そのため1日3回の礼拝を欠かさない。筆者は何度かミラルトゥレ学校の1日を体験させていただいているが、子どもたちだけではなく、子どもたちの通学時間前には教職員だけでも礼拝を行っている。ミラルトゥレ学校の根幹に、この博愛の精神に基づく共同が大きく根付いている。

博愛の精神は、障害児とともに暮らし学ぶ教育や、12年間の生徒を縦割りにした活動の導入など、学級における共同生活とともに、学校全体としての共同生活も意識されている。その共同生活の精神は保護者の中にも貫かれており、様々な機会に保護者が学校づくりに参画し尽くしている。

## 2) 体験重視の教育

ミラルトゥレ学校の朝は、礼拝後に学校周辺を「散歩」することで始まる。現在の校舎が畑や森林が広がる大地を切り拓いて造られたことから、周囲はのどかな自然に恵まれている。その立地条件を活かして、12学年全ての児童・生徒で散策するのである。そこでは大いに五感を働かせていく。そうして、そこで見つけたこと・見つけたもの・感じたことなどを生かして、人間性の涵養や生きた自然生態教育活動を展開していく。

教科教育においても、教科書に縛られず、体験重視の教育を進めている。例えば、日本で水道方式として使われているタイルを用いている。韓国には水道方式の概念がないために、ミラルトゥレ学校では算数用の独自のテキストまで作成して理解や習熟を図っている。地域社会の施設や環境を教育の場として活用したり、環境問題・文化財保存・助け合いなどの現場に実際に出向いて学習したり、さらには飼育・栽培を通しての食育なども進めていたりする。

## 3) 自分の姿を尊重し可能性を広げる教育

韓国では一般的に40人以上である学級規模を、ミラルトゥレ学校では16人までの2学級としている。そうして、共同することを重視する一方で、個性を尊重した教育を展開している。例えばそれは、自発性と個人差を考慮した個別教育であったり、子どもが自主作成した計画に基づいた学習・自主的文化活動の保障であったり、相談活動であったりという形で展開されている。

小学校から職業体験も重視されていて、自分の関心や能力に合わせた仕事を選べて、それぞれが力を発揮できるようにしている。ユニークなのは、規律的自治活動の徹底のために「警察官」、善行に対して与えられる校内通貨を発行する「銀行員」、その通貨を使用できる所として実際に駄菓子を販売できる「商店主」など、まさに社会体験する係活動が仕事として行われている。それらの体験も含めて、中高生になると就職したい仕事に実際に就いている人と出会える機会もつくられている。

## 4) 世界とつながる教育

東京にある私立和光小学校と、中国杭州にある緑城育華学校と姉妹校提携を結び、現在この3校間で開催地をローテーションして3ヶ国交流を深めている。実際に異国の地に3泊4日ホームステイし合って、互いの生活や文化を体験するのである。生活スタイルや考え方に相違点も少なくない3ヶ国が友好関係をもって過ごすことで、ともに過ごせる安心感もて、平和と友好の大切さも実感出来るとしている。また、モンゴルでの生活体験旅行も行われている。広大な草原の真ん中にあるゲルに宿泊して、大自然での生活を満喫している。

こうした生活体験を学ぶ動機に取り入れながら、外国語学習として英語を学ぶとともに

に、選択制で日本語・中国語も学ぶことも出来るようにしている。

### ③韓国の教育の中のミラルトゥレ学校

韓国内では、伝統的な儒教の思想が広く普及している一方で、キリスト教の思想もかなり普及しているようである。そこには、韓国でも失われつつある「愛」の精神の復権が背景にあると言える。チョン校長は、いち早くその「愛」の精神の復権を学校教育の中で実現しようと動き出した。ミラルトゥレ学校は、マスコミにもたびたび取り上げられるなど、韓国内でも大きく注目され始めている。能力主義教育が日本以上に強いと言われている韓国内においては、以下の理由で対抗軸となり、新しい教育のスタイルを提起していると言えよう。

ミラルトゥレ教育が、韓国内で新風を吹かせている第1の理由は、博愛の精神を学校教育の柱にしていることである。毎日3回のお祈りの場面を実際に目にしてきているが、礼拝堂に集合してのお祈りとは限らない。休み時間に放送でアナウンスが始まると、遊びを中断してその場で祈りを捧げていた。世界・民族・家族・仲間への愛を誓うのだと言う。日々3回博愛の精神を確かめ合っていると言える。その精神を発揮してか、同級生はもちろん他学級生や上下級生とも仲がよく、障害児もみなと一緒に交わって遊び学んでいる。少人数学級で教員が手厚く児童・生徒に関わっている。保護者の学校に対する「愛」も強く、大きな経済的利益を得た者は教会や学校に寄付するのは当たり前だと言う。財政的な支えにも「愛」の精神が発揮されている。

その点で第2の理由が、児童・生徒も保護者も学校への参加意識が高いということである。児童・生徒の参加では、特に教科外活動における「仕事」への参加意識が高い。休み時間となると、自由な遊びが始まる一方で、「仕事」の持ち場に就いて自治活動を始めるのである。ある上級生は、ビブスを身に着け帽子を被るや、校内を走る子を制止して注意書を渡したり、低学年の子のケンカを仲裁もしていたりした。警察官の役割を「仕事」として体験しながら、安全に学校生活が過ごせるようにしているのである。別の上級生は、休み時間にホットプレートでお菓子を作り出した。これは休み時間に実際に販売されるおやつなのである。おやつは、学校内での善行に対して与えられる通貨で買うことができるシステムになっている。おやつを販売する「仕事」をしながら、調理技術を向上させていると言える。高校生代表は、教職員代表と保護者代表と一緒に学校運営会議に参加し、学校運営をよりよくしていく立場で意見表明している。保護者も様々な学校運営が円滑に進むように分業し、イベントでは会場設営や進行を担うことも多いと言う。

第3の理由は、教科書のあり方を問い、教科書に縛られず、世界的に優れた学習内容と技術を取り入れた教育を進めていることである。水道方式で仕組みを理解しながら数量概念を豊かにし計算力を高めていく日本の算数教育を取り入れたり、立体的概念を造形遊びを通して豊かにしていく3Dピースの教育を取り入れたりしている。社会科に当たる授業

も地域と連携し現場訪問による取材教育を取り入れて進めている。理科学的学習では、実験を重視するとともに、毎日の「散歩」を通して自然の姿や現象を肌で感じさせて関心を持たせて、その概念を深めている。

第4の理由は、国際感覚、国際的視野の広い教育を推進していることである。近隣国の日本、中国との関係を深めて来る中で、ホームステイを始め、現在はモンゴルにも体験旅行できるような道を開いている。語学ありきの教育ではなく、まずは直接近隣国に行ってみて、肌でその風土・自然・生活・文化・食などを体験し、そこからのあるいはそこへ向けての関心から語学を学ぶことを大切にしている。そのため、英語を第1外国語としながら、日本語か中国語を選択して第2外国語として学べるようにしている。そして、いよいよ英語圏の国としてシンガポールの学校との交流も視野に入れてきていると言う。また、国際交流を進めるからこそ、自国の民族文化を深める教育も豊かに進め、サンムリノの演奏にも熱心に取り組んでいる。

#### 4. 進む日韓の小学生交流<sup>3)</sup>

##### (1) チョン校長一行の和光小学校訪問

2005年11月にチョン校長と世界の先進教育を視察する一行が、日本の学校の1校として初めて和光小学校を訪問する。そこで目にした、水道方式による算数教育や日本各地の民族舞踊を大事にする教育など全体を使った教育の姿に、特にチョン校長は感動したと言う。年が明けて3月、今度はトゥレ小学校（当時）の副校長・教務主任を伴って、チョン校長が再度和光小学校を訪問。じっくり時間をかけて参観し、教育づくりについて懇談した。5月、チョン校長が単独で3度目の訪問。その際に、2校間交流・ホームステイ構想についての提案があって、具体化するために協議を始めた。

和光小学校では、10年ごとに教育課程の見直しを進めており、2006年は再改定の年であった。そこでは、グローバル化が進む世界的な動きを背景に、「国際理解・異文化理解教育」を積極的に進め、「共生の思想」「グローバルな世界観」を子どもたちに育てていきます」と言う教育方針を新たに1つ加えた。日本国内では「外国語活動」と称して、実際には英語教育に狭めた教育が進められていた。そうした中で、語学先行ではなく、まずは交流を重視し、交流の中での関心の高まりを動機に語学も体験してみる教育のあり方を重視しようとしていた。そこで、「外国語活動」とはせず「国際理解・異文化理解教育」とした。実際の交流を含めた体験重視の姿勢を映し出している。

そこへトゥレ小学校からの訪問交流、ホームステイの申入れである。当然前向きな学内協議が行われた。しかし、初めての「外国人」の受け入れは容易なことではなかった。当時、「従軍慰安婦問題」が日韓の大きな政治外交問題になっていた。歴史問題は解決済み、「従軍慰安婦」の歴史はないとの日本政府の姿勢が、韓国内で大きな怒りを呼んでいた。日本国内では、その怒りの行為が連日報道され、逆に反韓感情が高められていた。そうし

た中で訪問交流・ホームステイの受入れの意義をいかに保護者に理解してもらうか、これが第1の山だった。しかし和光小学校では沖縄民族・アイヌ民族・他国の民族文化を体験する教育を日常的に進めていた。それを保護者も一緒になって学び共有する風土があった。そのために受入れを前向きにとらえる家庭が大半だった。初めてのホームステイに対しても26家庭が名乗り出た。

第2の山はことばをつなぐ手立ての問題だった。3日間の受入れとなると、全体会だけではなく、クラスに入っただけの活動も取り入れたい。そうなるにそれなりの通訳を確保しなくてはならなかった。当時それだけの在日韓国人あるいは韓国語に堪能な日本人とのつながりがなかった。しかし、通訳確保のための情報提供を保護者に呼びかけると、自らの日2世、3世であることを明かして通訳を買って出る保護者と、その知人を組織して13人が確保できた。子どもたちも最低限の挨拶ことばは言えるようにしようと、まずは教師が、ついで子どもたちが初歩的な韓国語を事前学習した。

第3の山は味の好みの問題だった。昼食に何を提供すると良いかで議論になった。結局、双方の食を日韓の子どもが一緒に作って食べたり、調理が難しい学年ではホームステイ先に日本の「お弁当」を用意していただくことにしたりした。韓国には日本のような箱詰め「お弁当」の風習はないそうである。ホームステイ家庭からも食の相談を受けることが多かった。そこで、トゥレ小にお願いして個々の子どものアレルギー、食の好みの情報を提供してもらい、2泊5食を工夫してもらった。

第4の山は生活スタイルの違いの問題だった。トゥレ学校では学校生活の中に「おやつ時間」がある。しかし、先進的教育を自認していた和光小学校でさえも「おやつ時間」はなかった。礼拝の風習も和光小学校にはない。一緒に裸になってお風呂に入る、湯船に浸かる習慣も韓国にはない。しかし、そうした生活スタイルの違いを一方的に押し付けることはしないことにした。全日和光小学校で過ごす1日、交流の機会の特別メニューとして、和光小学校の子にも「おやつ時間」を保障した。朝夕トゥレ学校の子とも教師が集う場所を確保し、礼拝が行えるようにもした。

最後は費用の問題だった。受入れ校の費用負担が大きいと交流も長続きしない。そこで、往復の交通費は訪問校の負担とし、入国後の費用はお土産代を除いて受入れ校で負担することを確認してきた。

## (2) トゥレ小学校生の初めての和光小学校訪問

こうして受入れ準備を整えた2006年9月、トゥレ小学校生70名が教員11人に引率されて和光小学校を初めて訪問した。

1日目午後、和光小学校の子どもたちと教職員が一堂に集まる体育館に一行が到着すると、温かな拍手をもって迎えた。代表挨拶の後、日韓双方の民族舞踊や音楽を披露し合っただけで交流の幕開けを祝った。そうして、トゥレ小学生2人1組で日本の家庭へのホームス

ティ体験に向かった。しかしその日は、温かな和光小学校家庭の受入れにも関わらず、ホームシックや生活スタイルの違いの戸惑いから、トゥレ小学校の先生達の携帯電話は度々鳴り、先生方はその対応に追われた。1組、ホームステイに馴染めずに先生に迎えに来てもらって先生と一緒に一夜を過ごす低学年児もいた。

2日目、トゥレ小学校の子どもたちが各学年学級に入って、1日、日韓文化交流を楽しんだ。和光小学校の子どもたちが日本の民族舞踊を教えて一緒に日本の踊りを楽しんだり、逆に「チェギチャギ」「韓国語フルーツバスケット」で遊んだり、6年生は「サンムリノ」に挑戦したりした。また、学年ごとで和光小学校の授業体験、6年生では互いの国の理解のために質問交流した。食研究をしている和光小学校の5年生では、日本の「おにぎり」作りを体験してもらう一方で、韓国の「トッポギ」作りも体験した。2日目のホームステイは1日目と違って穏やかだった。すっかり日本の家庭に打ち解けたのと、和光小の保護者たちの機転の利いた行動力がそうさせたのであろう。韓国の子どもたちを釘付けにするお楽しみの場所、例えば銭湯、駄菓子屋、お祭り、人気アニメを上映している映画館などに連れて行ってあげていたことが後で分かった。和光小の保護者もまた、韓国の子どもたちの心が読み取れるほどに理解を深めてきたと言えよう。

3日目はお別れセレモニーの日であった。ホームステイ家庭の保護者も加わって、再び体育館に日韓の子どもと教職員が一堂に集まった。トゥレ小学校の子どもたちに日本の踊りを練習した成果発表をしてもらったり、日韓子ども代表の感想交流、韓国語での合唱を行ったりした。大きく盛り上がったところでのお別れだった。花道を作って送ったが、その花道の出口にはホームステイの家庭の保護者が待ち受けていた。そうして、受入れ児童が来るや抱き合って、涙、涙で別れを惜しんでいた。まるで実の親子のような姿であった。一行がバスに乗る間も、乗ってからもホームステイした同士の子どもも別れを惜しんで離さなかった。最後は、飛行機の時間に間に合わないからと断ち切るようにして見送った。

### (3) 和光小学校の子どものトゥレ小学校訪問・韓国家庭へのホームステイ

この交流がきっかけで2校の関係は急速に深まった。まずは、校長同士が互いの大きなイベントに招待し合い、一層互いの学校理解を深めた。その輪はさらに裾野を広げ、今度は教職員有志が互いの学校を訪問し合って、学校理解を深めた。その後、長期休業期間を生かして互いの教員家庭にホームステイし、長期間学校体験したり語学研修したりする教員も、双方現れた。

そうして2007年3月、今度は和光小学校の子ども10数名がトゥレ小学校を訪問した。和光小学校の子どもたちがホームステイするのは初めてである。保護者にとっては期待の一方で不安が大きかった。そこで、保護者が自分達でソウル市内に宿泊先を確保し待機することは認めて出発した。日本あるいは和光小学校では体験できない文化活動や調理活

動、当時施設があったアーチェリーを存分に楽しんで大喜びで帰国した。

#### (4) 3ヶ国ホームステイ

2007年1月、韓国の学校経営委員会代表団が和光小学校を訪問した。そして、互いの授業づくりや学校づくりについて語り、質疑を通して理解を深め合った。その際、トゥレ小学校と提携していた中国杭州にある緑城育華小学校長も同行し、和光小学校を参観した。そこでの関係構築から4月、チョン校長とともに和光小学校の行田稔彦校長（当時）が、緑城育華小学校の招待を受け、中国最新のモデル校を参観してきた。中国富裕層が通う半官半民の学校だそうで、この学校に入りたいからと街が出来るほどの人気ぶりである。入試倍率は10倍を超えると聞いている。

筆者も何度か訪問してきたが、小中高一貫の緑城育華学校は、潤沢な資金を生かして広大な運動場や室内温水プールなどの運動施設、芸術工芸教育館、プラネタリウム、実験施設などを備えている。特に芸術工芸教育館は、地下空間を利用した広いスペースで、子どもたちの絵画・工芸・書道作品が美術館の装いで数多く展示されていた。未来ある子どもたちに投資する中国富裕層の教育熱意が、建築設計にも反映されていて驚くばかりである。

4月の校長訪問を通して、緑城育華小学校を交えた3ヶ国校が、様々な違いを乗り越えて、子ども同士がつながることと、教育活動がつながることの大切さを確認し合ってきた。同年10月、和光小学校6年生が学習旅行で滞在している沖縄に、トゥレ小学校と緑城育華小学校の有志が教員に引率されて合流した。初めての子ども同士の3ヶ国交流の実現である。1日沖縄を一緒に観光し、3ヶ国の踊りや歌を披露し合い、平和の礎の前で3ヶ国が平和を誓い合った。

そうして、2009年3月にトゥレ小に日中の子ども、2010年3月には緑城育華小に日韓の子ども、2010年11月には和光小に韓中の子どもたちが集まって交流を深めた。こうして、1年に1回、3ヶ国の小学校がローテーションして2国の子どもたちを受け入れる「3ヶ国ホームステイ」の関係が確立した。

東日本大震災直後の影響で和光小学校の子どもたちが中国に行けなくなってしまったりと、日中関係の政治的冷え込みが影響したと思われるが中国政府が緑城育華小学校の日本への出国を認めなかったりして、3ヶ国が揃わないアクシデントもあった。チョン校長らがトゥレ学校に解雇されるアクシデントもあった。しかし、現在も3ヶ国交流は続けられている。

## 5. 韓国の新教育との大学生の出会い

### (1) 本学におけるチョン校長の特別授業内容

ソウルの大学を卒業後、公立、私立の小学校に15年間勤めたが、子どもたちがあまり

幸せではないと感じた。今、韓国の教育は危機にあると思っている。そこで、新しい学校を作ろうと決心して世界各国の学校を視て回り、特に日本の和光小学校を見て感動した。誰かがモデルとして学校を作る必要があると考え、退職してミラルトゥレ学校という小さな学校を作った。

私の作った学校は小1から高3まで260人の小さな学校だ。バス停から学校がある地域に入ると、森や畑が広がる豊かな自然環境がある。そこで、子どもたちが直接触れたり体験したりすることを目指した教育をしている。学校を1つの町として位置づけて、町としての機能を持たせている。例えば、学校で流通しているお金があり、子どもたちはお金を稼ぐことも出来るし、そのお金で買い物や貯金、寄付なども出来る。1年から12年までの生徒を縦割りにした14グループでの活動も大切にしている。このグループを「ミラル兄弟」と云い、年に1回グループ旅行に出かける。旅行先・宿舎・食べ物など全て子どもたちで決める。この旅行で子ども同士が仲良くなって本当の兄弟のようになる。

2006年度からは毎年日中韓の3ヶ国でホームステイし合いながら交流している。2007年に初めて3ヶ国が沖縄に集まり、戦跡巡りをして戦争の悲惨さを学び平和の交流をした。3ヶ国の子どもたちの交流は大人たちの世界にも影響を与えた。

私は、各国の教育のあり方を変えるという目標で学校を運営している。韓国の教育を変えたい。また、その運動に携わりたい。ミラルトゥレ学校の運営も大切ですが、このような学校が韓国全土に出来るような運動をつくりたい。生涯のうちに6つの学校を作りたい。現在、中国に1つ新しい学校が出来ていて、今年3月にはもう1つ増える予定。また、2017年にはソウルから30分のところにも新設校が出来る予定なので、これで4校となる。

夢を1人で見ていては実現しませんが、同じ夢をたくさんの人が持てば現実となる。1995年に新しい学校づくりの夢を見たが、1人で見ていた遠い夢だった。しかし、同じ夢を持った人が5人集まったときに現実となった。同じ夢を持つ人が集まることが大切。今、韓国の教育全体を私たちの力で変えていくことを夢見ている。必ず叶うと確信している。

教育の目標に対する考え方は、東洋では正しい経験をさせてやさしい人をつくろうとするが、西洋では神様から与えられた才能をどうやって使うかで考えていく。私のミラルトゥレ学校では、小学校では人格教育に力を入れて良い子どもをつくることに、中学・高校では持っている才能を引き出すことに力を入れている。

私は、教育とは人を変えること、変化させることだと思っている。でも、外からの圧力で変えることは出来ない。人を変化させる力は内面にある。心の内側から変わっていきたいという意思が必要。強制的に何かをさせることは意味がない。自分も出来るということを感じさせることが大切。教育にとって大切なことは、自分はどんな人間か、この世でやる価値は何か、どんな価値観を目指すのか、これらを日常の生活を通して生徒たちに感じ

させることで、これが教師の仕事。生徒たちの胸を熱くさせることが教師の役割だと考えている。

教育の目標は4つある。1つは知的な成長。2つ目は社会的な成長。3つ目は身体的な成長。4つ目は霊的な成長。4つの要素は有機的に関連しているが、最も大切なのは、④の霊的な成長（筆者註：日本では「人間の内なる成長」「夢・希望・意欲をもった生き方」に当たると考えられる）。④の霊的な成長、すなわち人生をどのように生きていくか、自分の夢や目標がどこにあるかを悟った人は、①の知的な成長と②の社会的な成長が同時に進行する。目標がはっきりしているから勉強もする。こういう人は自分1人では無く、一緒に生きていくことも大切にする。丈夫な身体に健全な精神が宿る。③は④の基盤であり、④は①と②の基盤である。

韓国の教育が危機的な状況にあるのは2つの理由による。1つは家庭の問題。離婚率の上昇もあって、家族が忙しくて顔を合わせる時間も無く、夕飯も一緒に食べないなど、家庭としての機能が崩壊していること。子どもたちは愛と励ましを親から受けることが必要で、これが無ければ心と身体のバランスが崩れる。2つ目は学校らしくない学校が増えたこと。今の韓国の教育は大学入試に偏っていて、良い大学に入ることが良いことという価値観となっている。学校生活には2つの喜びが必要。知的な好奇心が得られることと、人との付き合いの楽しさが分かること。

韓国の教育が危機であるのは事実だが、私はこれをチャンスとして捉えている。危機の原因を知ることによってチャンスとなる。私は、子どもたちが夏休みや冬休みを減らしてほしいというような学校をつくりたい。学校に来ることが楽しい学校をつくりたい。また、親たちに、幸せな家庭が教育の基本になることを教えたいと思っている。

## (2) 参加学生の感想の中から

- ・今日本にある名古屋芸術大学で日本の教育について学んでいましたが、本日の特別授業を受けて、改めて日本以外の教育について目を向けることが出来ました。日本の教育しか知りませんでしたが、韓国の教育も、その国に合わせたしっかりとした教育がなされているのだなと感じました。
- ・私達はちょうどとり教育でいられる時代で、韓国の学生は逆に受験が人生で一番大事と言われるほどの勉強漬けの時代で、客観的に「韓国って大変そうだな」と感じていました。私も何人が韓国人の友人がいますが、私と勉強に対する姿勢が違うなと思います。よく聞くのは、「良い大学に入って、良い会社に入らないと良い人生ではない」、そういった言葉です。でも私はその考え方についてすごく悲しいと思っていました。今日聞いた話で、本当に子どもに必要な教育とは何かを改めて知ることが出来た。日本の教育にも必要だと思いました。
- ・韓国の学校のイメージが、もっと「教育」「勉強」って感じの、自由のなさそうなイ

メージだったけど、ミラルトゥレ学校は子どもが主体になって、全体で学校を作っている感じで、とても楽しそうに思った。また、学校の中でだけ使えるお金や、学校で犬を飼うと言った、なかなか日本にはない工夫も面白いと思った。知徳体だけでなく、魂の成長も大切にしている、それは人として大事なことから、すごく素敵だと感じた。

- ・今回の授業を聞き、日本と違う点が多く、日本が学ぶ点も多くあると思った。私はあまり外国の学校に興味がなかったのですが、今回の授業で韓国にとっても興味をもちました。いずれ韓国の子どもたちと話をしてみたり、遊んでみたいと思ったし、韓国にも行ってみたいと思いました。日本とは違い、見た目で差別をしないところも好印象に思えました。日本も韓国（筆者註：正確にはミラルトゥレ学校というべき）と同じようにしたらいいと思いました。
- ・日本で行われたことが10年後の韓国で行われているということと、韓国の教育が危機だということに驚きました。しかし、チョン校長先生は、危機を新しく変えていくいい機会だと言っていて、変えていき、より良くして行きたいという思いがとてもすごいと思った。
- ・学校の制度や仕組みを、社会の制度や仕組みとほとんど同じようにしたり、お金の大切さを実感させる為にも、銀行というシステムや罰金などがあたりすぎるのは、すごいなあと感じた。また、子どもを先生が注意するのではなく、警察という委員会のような係の子どもが注意することで、子ども同士で解決する力が身に付くだろうし、良いなと思った。そして、学校の教育方針の中で、夢に向かって頑張っている人は、勉強も頑張れるというのを聞いて、改めてがんばろうと思ったし、素晴らしい教育方針だと思った。
- ・韓国には学校に行けてない子が多くいることが分かってびっくりしました。その原因に離婚率が高くなったということが分かりました。また、大学に入る為に学ばせる勉強が中心で、他に学ぶことをおろそかにしているからということも分かりました。この2つは韓国だけではなく、日本にも言えることだと思うので、良い大学に入れば幸せになれるという価値観は少なくして、本当にもっと子どもが幸せになれる教育ができるとういと思いました。危機を機会にするという言葉も印象的でした。
- ・障害を持つ子もみなと同じように授業を受けたり、日本のような変な壁を作ったりしないのもいいなと思いました。
- ・愛情、関心、興味の3つがあることにより、生徒だけでこれだけの活動ができ、子どもの意欲がとてもそそられることが多いので、楽しい学校生活を送られることが良いと感じた。日本にもこのような学校があれば、不登校などが出にくいなあと思い、私もこのような学校をつくりたい。
- ・チョン先生が掲げられている教育目標の中に、日本でも大切だと思われる「知・体・霊（徳?）」と同じことが語られているのに驚きました。日本の教育も、子どもた

ちが将来のビジョンが見えるような教育や環境を整えていくべきだと、今回の講義の中で思いました。

- ・愛情を受けられずに育った子どもが多く、勉強しても軍人になってしまい、軍人になってからも仲間を死なせてしまうことがあり、それは教育のせいだと聞いて驚きました。ミラルトゥレ学校は、そのような子が増えないように、みんなに愛情や教育を平等に受けられるようにしていると知って、とても素敵だなと思った。
- ・今回の特別授業を聞いて一番印象に残ったのは、「1人が思う夢は夢で終わってしまうかも知れないが、10人が同じ夢を思えば現実になる」という言葉です。本当にそうだなあと思いました。1人では難しい夢を10人で協力すれば現実になると思います。
- ・韓国は日本の10年前の姿と言われて、そうすると日本での教育も見直していく必要があるなと思いました。韓国の教育も良い方向へ変わっていけるように頑張ってもらいたいと思いました。ミラルトゥレ学校でやられている取り組みはすごく良いと思えました。日本でも参考にできることを取り入れていくべきだと思いました。
- ・鎌倉先生とチョン先生のように、人とのつながりはすごいなと思い、大切だなと思えました。私も人との出会いを大切にしたいです。

### (3) 今回の企画の意義

本学学生に限らず日本人には、韓国の教育、韓国の学校のあり方を見つめる機会や研究が十分あるとは思えない。チョン校長が「韓国の今は日本の10年前の姿」と言う感覚がどこかにあって、そこに注目する価値が十分認識されていないからであろう。しかし、それは韓国の教育、韓国の学校一般を見ているからである。実は受験競争が激しいと言われている韓国内でも、全ての国民がそれを良しとしている訳ではなく、むしろそれを跳ね返し創り変えようとしている力がどんどん根を広げているのだという事実があるのだ。この韓国の教育、韓国の学校のもう一方の姿に出会えた。このことがまず何より今回の企画の大きな意義であったことだろう。

2つ目に、その韓国の教育、韓国の学校の新たな姿として広がってきている「ミラルトゥレ学校」と言う、日本にもないような実にユニークな学校づくりの具体的な姿に出会えたこと、これが次なる大きな意義となったことだろう。キリストの教義の部分は除くとして、斬新な教育活動は、これからの学校教育、幼児教育を担う学生達にとっては、何かしらの教育づくりのヒントになったことだろう。日本の教育も再び形式化してきている。先進的と言われる和光小学校ですら「おやつ時間」はない。しかし同じ学園内の和光中学校では、生徒の要求であると同時に昼食から夕食までの間隔が長いこと等を踏まえて、生徒自身が作ったルールに基づいて「おやつ」を認めている。「先進的」に甘んじることなく、常に創造と改革を進めていかなくては、本当の「先進」にはならないことを思い知らされてきた。これからの教育を担う学生達にはそうした発想を常にもってほしい。

そう願うからこそ、全く斬新な学校の姿として頭に焼き付いておいてもらえたならと願っている。

3つ目は、国のあり方で優劣をつけず、新しい教育づくりに挑む世界各国の芽に常に目を向け、日本の教育や学校づくりをその地平の中で常に見つめ直していく。そうした機会のきっかけをつくった意義である。日本にも民間教育研究運動と言う、世界でも類まれなる研究推進活動がある<sup>4)</sup>。創造と変革を進める学校づくりは世界各国に点在しているのがある。それをつなぎ合わせて、自国あるいは自校の教育づくり・学校づくりに生かしていく。そうした視点に着目できる機会となったことの意味は大きいと思う。

## 6. 今後の研究課題

今回の特別授業・公開講座は単発の企画であった。本学学部主催とは言え、受入れ費用が十分なく個人負担もしながら実現した企画であった。「世界の新しい教育・学校づくり」に目を向けた教育研究に対する理解をより本学に根付かせたい。そのためにも、私自身が世界の教育に対する視野を広げ、実際に交流できる関係を築いていかななくてはならない。

また、特に隣国の教育についての研究も深めていきたい。国の政策によって教育・学校づくりの考え方や進め方が違うことは踏まえつつ、違うから参考にならないのではなく、違う中にも学ぶ価値を見出す研究が必要である。隣国の今までの教育の姿が反映している現代の一般的な教育はどうであり、それに対してどのような創造と変革が進められてきているのか、その創造と変革が国の政策によるトップダウンの動きであるのか、教師本来の創造と変革の意識によるものなのかも見極めて追究してみたい。

そうして、再びこうした成果を生かして、本学学部あるいは本学学部生にも、実際に隣国を大事にした「世界の新しい教育・学校づくり」の姿として研究還元できるようにしていきたい。

## 参考文献

- 1) 高安雄一「韓国の私教育に関する検証」ERINA Discussion Paper No. 1101 韓国経済システム研究シリーズ No. 18 環日本海経済研究所 2011年
- 2) 水田聖一「韓国の文化と幼児教育の現状」国際教養学部紀要 第4号 富山国際大学 2008年 pp. 193-201
- 3) 古川武雄「和光小学校の異文化国際理解教育」第23回公開研究会発表要項 和光小学校 2007年 pp. 127-141 を参照してまとめた。
- 4) 川合章『教育研究 創造と変革の50年』星林社 1999年 に詳しい。

写真群① ミラルトウレ小学校



少人数の教室風景



伝統音楽「サンムリノ」の授業風景



校舎内の調理室で作られる給食



生徒総会の風景



障害の有無に関わりなく遊ぶ風景



「警察官」 女児が低学年男子のケンカを仲裁中



「おやつ」を調理・販売する女児



学校内通貨を発行する「銀行員」男児

写真群② 緑城育華小学校



資金の半分を出資している不動産会社が学校のすぐ隣に街を形成している



400mトラックのグラウンドから見た校舎



サッカー、バスケット、テニスコート



プラネタリウム



教室（半円形に並べられる机）



教室の一角



図書館



美術工芸教育館に展示されている児童作品

写真群③ 日中韓3ヶ国交流 (ミラルトゥレ学校にて)



韓国の母子と記念撮影 いざホームステイへ  
(左から2人目と3人目が和光小児)



左2人目が日本、4人目が中国、あと2人が韓国児  
3ヶ国で韓国料理に挑戦



韓国のお面づくりと作品



韓国の踊り発表



けん玉の技を披露する和光小代表



目の前で書いた書道作品を見せる中国代表



抱き合う和光小児 (上) と韓国のお母さん (下)